

タイ国植物調査小史

岩槻邦男・福岡誠行

はじめに

熱帯において現地人による学術研究が発展しないという通則は、植物学にも例外を設けなかった。東印度会社を中心にして英領印度の植物は既に前世紀中葉に大巾に解明されていったし、印度支那諸国の自然はフランスの研究者によって少しずつ研究されていった。オランダはピッテンズブルグに東亜植物学の中心を置いて大規模な調査活動を行なったし、シンガポール植物園は今世紀になってからアジア有数の標本庫を持つようになった。マニラの科学局の標本館は不幸にして第二次大戦の戦火に滅ぼされはしたが、ここを中心にしたアメリカ人研究者達の活動がアジアの植物学に占める位置は決して歴史のページから消え去ることはない。ついでにつけ加えるなら、日本人が最近半世紀に成し遂げてきた琉球、台湾の植物の研究もまた東亜の熱帯、亜熱帯植物調査史に輝かしい跡を残すものである。

広大な中国の奥地を別にすれば、アジアの熱帯、亜熱帯のうちで、植物相の調査が一番遅れているのは、多分、インドネシアの一部（スマトラやニューギニアなど）と、開発の進んでいる度合を考えに入れた場合のタイ国であろう。特に、第二次大戦後に驚異的に開発が進んで、最近では一口に後進国の範疇に押しこめてもしまえなくなっているタイ国で、植物相の研究が甚だしく立ち遅れているというのは、むしろ意外な感じさえも与えることである。もっとも、このことは、未開地域におけるように資料不足からきた調査不充分というのとは少し違って、既にある程度の資料が集積されておりながら、それを解析的に比較検討する仕事がおざりにされていたというような意味合いのものでもあり、それはそのまま、独立を保持し続けてきた後進国の特殊性を物語る好例であることなのかもしれない。

たとえば、昭和40年度に私共がタイ国植物相の調査を始めるまでに、シダ植物が約300種タイ国から報告されていた。そのタイ国で、私共だけで、約450種のシダ植物を採集してきた。1回の調査旅行で採集した

ものが既知の種数の1倍半に達するというのは、これは驚異的な数字である。けれども、その後、既に蒐集されている各地の資料を検討してみた結果、未発表のままに死蔵されている標本が意外に多いことも判明した。それらを検討し、私共の野外調査の穴を補うことによって、タイ国植物相についての知見をより完全なものにすることは、私共の調査にとって不可欠の務めである。

そこで、これまでに行なわれてきたタイ国植物調査の歴史を簡単に跡づけてみて、何がよく分かっているどの部分が調査不充分なのかここでその問題点を指摘することを試みてみた。

1 19世紀における調査

現在行なわれている植物分類学の歴史は1753年に始まる。これは、万国命名規約によって、この年に出版された Linnaeus の *Species Plantarum* 第2版を植物名の出発と規定し、命名の先取権をそれ以後に認めることにしているためである。もちろん、分類学という種が認識され始めたのは John Ray が植物種属誌を出版した1686年の頃にさかのぼることができ、Linnaeus 以前にも簡単な種類誌が刊行されたこともありはしたが、やはりまとまって植物誌の研究が進められたのは、18世紀後半からであるといつて大過はない。

タイ国の植物に関して一番古い文献というのは Retzius の *Observationes Botanicae* で、この第3冊¹⁵⁾の付録に König がタイ国産の植物を9種記載している。これは報告者自身の資料に基づいたものであるが、何でもその標本は極めて貧弱なもので、再検討に耐えぬものであるということである。

19世紀になると、東印度会社に関係していた Finlayson が1821~23年に、ビルマやラオスで採集しているが、その旅行の途次に北タイの植物を持ち帰ったものなどが、本式の調査の始まりといえるのではあるまいか。彼の資料は J.D. Hooker などが研究して、英領印度植物誌⁶⁾にも引用している。また、1860年前後に英国の Bangkok 領事をしていた Sir R. H. Schomburgk は中部タイを中心にして標本を蒐集し、英国へ送り届けている。

この世紀の後半に入ると、各地に探検家の入る機会が増えてくる。L. Pierre はカンボジアに伝導に入っ

た宣教師だったが、そこで莫大な量の植物を採集した。彼の標本は、わずかながら、東大や京大の腊葉庫にも入っているくらいである。彼はその足跡をタイの領域にも及ぼしていたので、後に出版された交趾支那森林植物誌¹⁹⁾にはタイ国の植物も併記されている。マレイ半島は古くから商港 Singapore を足場に、植物標本の蒐集も進んでいたところであるが、採集家達の足は、当然ながら、タイ領の Pattani や Phuket にも及んでいる。1881年から約20年間 Penang に居て、この地に植物園を創ったりした C. Curtis も度々タイ領まで足を伸ばした人の1人であるし、L. Wray, Jr. や J. E. Teysmann なども同じ頃に相当量の採集をやっている。これらの資料は H.N. Ridley のマレイ半島東岸の植物相についての論文²⁰⁾に引用されている。さらに前世紀末には、植物地理学者の A. Zimmermann が Bangkok 周辺で調査を行なっているし、F.H. Smiles は主として北タイで300点ばかりの標本を採っている。英人達の採集品や、またタイ国の植物についても一番豊富な収蔵を誇っている Kew 腊葉館に送られた標本については、前世紀のものは、J. D. Hooker が詳しく研究し、*Flora of British India* には可能な限りの資料が引用されている。

タイの植物について、比較的まとまった最初の文献といえば、J. Schmidt が中心になって編集し、世界中の学者の協力を得て *Botanisk Tidsskrift* に連載された“Flora of Koh Chang”²¹⁾で、これは1899年から1900年にかけて Chantaburi の南の Koh Chang 島へ出かけた Danish Scientific Expedition の成果の報告である。ここには、沢山の専門家の協力を得るという利点もあって、タイ湾上の小島の研究だと軽視することのできない豊富な内容をもった記録が掲載されている。いずれにしても、この研究は、前世紀における散発的な調査を一つのまとまった方向に移していった最初の試みであるといえるし、その意味で非常に成功した仕事であったともいえるものである。

また、Schmidt の調査と同じ1899年に、マラヤから Skeat Expedition がマラヤ半島北部を調査するために派遣されており、Reading の教授だった D.T. Gwynne-Vaughan が植物標本を採集している。

2 今世紀初頭の調査

ある程度資料の蓄積が進み、機が熟してくると、そ

れに見合った仕事をする人が現われてくるというのは、あたかも歴史の必然的な展開かと思えるくらいである。世紀があらたまった頃のタイ国は、その政治区画は必ずしも明確、固定的なものではなかったのだが、それでも、Kew 腊葉館に運び込まれた資料を基礎にしてタイ国植物目録を編纂しようという人が現われてきた。F.N. Williams がその人で、“Liste des Plantes Connues du Siam”³⁰⁾を *Bulletin de l'Herbier Boissier* に1904年から5年にわたって連載している。これは、筆者自身はタイを訪れたことがなくて、純粹に腊葉標本と文献だけを頼りにした仕事であるが、植物相調査の初期のある段階ではそういう取りまとめも大切な意味のあるもので、事実、Williams は克明に資料を検討し、要領良い植物目録を作っている。念のために数字を挙げると、この目録には種子植物が979種列挙されており、次に述べる Ostenfeld の報告から転記した付録の63種を加えると、計1042種が1905年当時に分かっていたタイ国産植物の全部であるということになる。(ただし Williams のいうタイ国のうちには Angkor や Bassac、それに Kedah なども含まれている。) この目録は、簡単に種名を列記しただけのもので、批判的なことはほとんど加えられてはいないが、最初の総合的なタイ国植物目録として意味ある業績であるといえる。

Williams が目録をまとめた頃までには、上述の採集品の他に Thorel, Harmand, Murton, Keith などという人達の断片的な蒐集品が加えられただけで、その数も4250点程に過ぎなかった。しかも、Smiles の採集した300点程の他は、ほとんどが中部や半島部の標本で、これだけではタイ国の植物相はその一部を知ったともいえぬ程だった。だからこそ、北部の採集品がこれに加わると、まるで異なった地域からの資料のような結果をひき出すことになる。ちょうど Williams の目録が連載されている時に、同じ雑誌に、C.H. Ostenfeld が Lindhard の採集目録¹⁸⁾を発表している。Lindhard という人はデンマークの東アジア会社の仕事でタイ北部の森林調査をやった人であるが、その本務の合間に採集した標本を Copenhagen に送り、それを Ostenfeld が専門家の協力を得ながら調べた結果が上述の報告になったもので、ちょうど100種(うち7種はシダ植物)の維管束植物が挙げられているものである。ほとんど草本だけであった93種

の種子植物のうち、63種までは Williams の目録に載っていなかったもので、その数字が、この頃の知識の程度を如実に物語る。特に北部の山岳地帯のように植物の面では面白い地域が、ほとんどまだ調べられていなかったのである。

その頃にタイ国でもう少しまとまった植物調査をやった人に C. C. Hosséus がある。このドイツ人は単身でやって来て、1904年から5年にかけて、半島部を除く各地で動植物の標本を採集し、民俗的な記録を集めている。彼の踏査した場所のうちで主なものを挙げてみると北部では Meng Fang, Doi Chiengdao, Doi Sutep と Chiangmai, Doi Intanon, Doi Saket, 中部では Petchabun, Nakhonthai, Pagnampoh である。蒐集品のうち、植物については、彼自身の研究と、資料の検討を依頼した専門家達からの報告とをまとめて、いくつかの論文⁷⁻¹³⁾にして発表している。また、タイ国のキツネノマゴ科の総論は、この種のものとして初めての論文でもある。

このようにして、タイ国の植物もやっと先進国の文献の上に姿を現わすようになってきた。しかし、19世紀以来研究が進んでいた英領印度や、今世紀に入ってまとまった植物誌の出版され始めた印度支那やマラヤなどに比して、タイ国だけは学問の大きな流れから取り残されてしまうことになった。(印度支那の植物誌は Lecomte, M. H. *Flore Générale de l'Indo-Chine*¹⁷⁾ が1907~1951に出版されているし、マラヤでは Ridley, H. N. *Flora of the Malay Peninsula*²⁶⁾ が1922~1925に完結している。これら二つの植物誌にはタイの資料に言及されている部分がある。)

3 A.F.G. Kerr とその業績

タイ国の植物調査史のうちで最も重要な位置を占めるのは、イギリス人の医者であり、後には完全に植物採集家になりきってしまった Arthur Francis George Kerr (1877~1942) である。

Kerr がタイ国へやって来たのは1902年、25才の時であった。翌年夏、Chiangmai の保護医として緑の古都に赴任した Kerr は、Ireland に育った少年時代にもよくそうしたように、余暇をみては山野を跋涉した。そして、そのうちに、彼の自然に対する深い愛情が、この地に美しく咲き誇るランを筆写する作業に向かわせることになった。植物学の専門の勉強をした

ことのなかった辺境の若い医者が、そのようにして花の持つ美しい形に惹きこまれていったのである。

1908年に一旦英国へ帰った Kerr は、ランの写生図を215種も持っていた。たまたま Kew に立ち寄った Kerr が、ランの専門家であった R. A. Rolfe にその図を見せたことから、未開地の資料蒐集に努力を惜しまなかった Kew 腊葉館が、Kerr に植物標本の採集を依頼し、援助をすることになった。間もなく、タイ国へ引き返した Kerr は、Bangkok から Chiangmai への船旅の途中、1908年12月1日の日付で彼の最初の標本を Paknampo で採集する。それから本職の医療業務の合間に、ある時はせいぜい月に一度森林へ入ることができるだけというような調子ではあったけれども、Kerr の採集は徐々に蓄積量を増やしていく。標本はでき上り次第、Kew 腊葉館に送られ、そこで専門学者の研究に委ねられる。もともとその道の勉強をしてこなかった人であるに拘わらず、Kerr の植物標本は最初から非常に良質のものであった。いったい、植物標本の作製には、そんなに難しい法則や作法があるものではなく、ただ丹念に注意深く作業されさえしたら、標本の質を良くすることは誰にでもできることである。もともと自然の親しい友であった Kerr は、それだけにものごとの取り扱い方もきっちりしていたらしく、標本に作られた植物自体も、それに付けられたラベルも、それは立派なものである。

Kerr の植物研究にとって非常に好運であったことは、最初から Kew 腊葉館と連絡を取っていたことでもある。しかも、そこで、ごく初期からずっと後まで、タイ国植物の研究で協力関係が続けることになる W. G. Craib (1885~1933) という好伴侶に恵まれることになる。(Craib はその頃 Kew に居たけれども、1915年からは Edinburgh に移り、1920年には Aberdeen の勅任教授となる。けれども、Kerr と Craib の出逢いは、終生続く友情に発展し、タイ植物目録⁵⁾という実を稔らせることになる。) Kerr が Kew に送った最初の標本から、タイの植物の研究は、Kew では、Craib の手に委ねられる。そして、1911年に至って、Kerr の Doi Sutep の植生に関する報告と、Craib の彼地の植物目録を合わした、2人共同の“Contributions to the Flora of Siam”がこの年の *Kew Bulletin* の巻頭を飾ることになる。*Kew Bulletin* に掲載されたこのシリーズの論文は主として

Craib が書いた。シリーズの 1, 2, 5 の 3 篇は採集品目録であるが、これは、北部の資料が決定的に不足していた Williams の目録に対する補遺の意味をもっていた。他の篇は Addenda とされてはいるが、これはそのまま後続の *Florae* のための予報とでもいうべきもので、一部はその補遺に相当するものもある。Craib 以外に Kerr, Geddes らの手になるものもあり、Craib の死後は Fletcher や Barnett, それに Kerr らが中心になって 1940 年に 53 番目のものが出るまで続いている。出版の場所は後の文献リストに一覧表を掲げた。⁴⁾ それ以後、Kerr のところからは腊葉標本だけでなく、生材料や種子なども Craib の手許に届けられ、それが Craib によって比較検討されて公表され、タイの植物相は一つ一つ明らかにされていったのだった。

植物標本に対する執着は Kerr の内面で少しずつ強まっていき、遂には、医者という本職を等閑にするようになる。やがて、タイ国政府も研究部門創設に踏み切ることになるが、そんな話が Kerr のところにもたらされてからも、計画は遅々として進まない。1920 年 Kerr は父の死の日にもあえて Chiangmai へ戻ろうとはせず、Bangkok で新しい任務を求め続ける。そのようにして、とうとう 9 月 1 日付で、タイ政府任命植物学者の肩書を得る。その日にタイ政府商務省に初めて植物部門が設けられ、その長に Kerr が任せられたのである。それ以来、彼は大手を振って植物調査に専念する。(とはいっても、彼の博物史的興味は植物学の範疇に極限されることはなく、蝶の採集をして友人の E. J. Godfrey の研究を乞うたり、考古学や民族学に興味を持ったり、また、植物についてはその土名を詳しく採集したりもしている。) その後、1932 年になって 30 年に及ぶタイ国政府への務めを終えて英国に引き揚げるまで、Kerr の職名は何度か変更されたし、所属する官庁もいろいろと変わったけれども、植物調査に奉仕する彼の態度は変らなかった。そして、2 万点を超える植物標本の作製と、数えることのできない程の顕著な業績を、その 30 年の間に Kerr はタイ国に残していったのである。

Kerr と Craib の協力によるタイ植物相の調査研究は、やがて、この国の植物分類学にとって記念碑的著作ともいうべき *Florae Siamensis Enumeratio*⁵⁾ を産み出すことになる。これは、Kerr とその友人達

によって詳しく調査蒐集された資料を駆使して、タイ国産植物を列記したもので、一つ一つの種類にも鋭い批評眼をもって検討が加えられている。その第 1 巻は 4 分冊になって、1925 年から 31 年にかけて出版され、著者は Craib になっているが、刊行前に Kerr も一通り眼を通したという。引き続いて第 2 巻も Kerr が英国へ帰ってから原稿が少しずつ整えられる。しかし、業半ばにして、1933 年に Craib は親しい友人に看取られながら大脳腫瘍で友に先立って逝く。残された Kerr は H.R. Fletcher らの協力を得てその仕事を続け、5 分冊に分った第 2 巻を 1939 年に終える。さらに、Craib の仕事の跡を頼りにして、*Enumeratio* の原稿は Kerr の手許に準備されていく。しかし、その第 3 巻が上梓される前に、長年の熱帯生活に慣れた身体が耐えることのできない英国の気候に敗れて、1942 年、良い友であった Craib を追って Kerr もまた冥界へ旅立ってしまった。(Kerr の死後、戦争中であるという悪条件も重なって、第 3 巻の出版は遅々として進まず、やっと戦後になって、Siam Society の手許で Kerr の原稿が整理され、1951, 54 年に第 1, 第 2 分冊が出版される。さらに Aberdeen の後継者である E. C. Barnett が監修し、Bangkok の Tem Smitinand らの熱心な協力もあって、1962 年になってようやく第 3 冊が陽の目を見ることになり、これで第 3 巻が一段落した。しかし、この部分は原稿の整備も充分とはいえず、印刷上の注意もおろそかで、前 2 巻に較べると幾分見劣りのすることは否めない。また、上の 3 巻で双子葉植物の大部分が終ることになるが、単子葉植物や裸子植物はとうとう出版されずに終ってしまったし、また、今となっては、Craib と Kerr の段階で出版できるものでもなくなっているように思われる。)

4 第 2 次大戦までの調査

Kerr がタイ国に残した業績は自分自身の足で調査をしたものだけではなかった。最初、政府御用植物学者として、いろいろの知見をタイ国内に紹介したり、国内での調査研究に便宜を計るための様々の援助をしたりして、この国の博物調査に大きな貢献をしたことの方がむしろより大切なものだったかもしれないくらいである。既に Hosséus がその調査旅行の途次に Kerr に世話になったことを記していることも、この

世話好きの人の面目をはっきり示しているものである。ドイツからやって来たもう1人の探検家で地理学者の W. Crebner も1927年から29年に及ぶ旅の間に Kerr の世話になり、彼の蒐集した植物標本も Kerr に同定を依頼している。

事実、Kerr との交友から植物採集を始めた人の数は多く、今世紀に入ってからのタイ国植物調査史はそのまま Kerr の生活史と交友録に置き代わるかもしれないくらいである。D.J. Collins 夫人は Chiangmai で Kerr と知り合い、採集を始めたが、夫の死後は Bangkok に移り、そこで Siam Society の博物部門の仕事を引き受け、また、東へ南へと採集旅行にも出かけている。Kerr にとって最も良い協力者であり友人でもあった人である。また、H. B. G. Garrett (ca. 1871 ~ 1959) は森林局に関係のあった人であるが、Kerr が Chiangmai へやって来た当時から終生の親友であった。退官してからも森林での仕事を死ぬまで続けた人で、標本の量はそれ程多くもないけれども、質の良い興味深いものを、北部の山地で採集している。Doi Intanon には10回、Doi Chiangdao へは12回も登っている。Kerr の末弟である F.H.W. Kerr (1885~1958) も Chiangmai 在住の兄を訪うた時から採集を始めた。タイに旅していた期間は短かったが、兄の仕事を助けた意味には大切なものがあったようである。A. Marcan (1883~1953) は Kerr にとって最も親しかった友人で、2人はよく一緒に採集に出かけたりした。Bangkok 周辺の採集に関する限り、Kerr の蒐集品はほとんど Marcan の協力を得たものである。植物を通じて結ばれた2人の友情は、もっと中広い人格の交流にまで高まり、Kerr の死後も *Enumeratio* の仕事のために Marcan は尽力を惜しみはしなかった。Eryl Smith 夫人は夫の Malcolm A. Smith と一緒にタイ国へやって来た医者であるが、特に半島部などでシダ類にも興味をもって採集をした。東南アジアの各地に採集旅行の足を伸ばしたので、タイ国では1922年頃に採集しただけで、期間は短かったけれども、きわめて効率の良い仕事を残している。1925年に英国へ帰り、Kew 温室館でシダ類の研究を始めるが1930年自動車事故で亡くなっている。また、動物学者であり、Siam Society の博物部門の指導者でもあった H. McCormick Smith も、Kerr との親交がきっかけになって植物標本も作るよ

うになった。わずかな量ではあるが、資料は Smithsonian Institution に残されている。

どこの国にしても、自然の調査が本当に着実に進捗するのは、その国のうちから研究者が出るようになってからである。通りがかりの旅人に過ぎない一握りの外来研究者は、その人達がどんなに秀れた人達であっても、通り一遍のことしかできないものだからである。そして、そんな意味からも、Kerr はタイ国に偉大な足跡を残してきた。彼と親交を結び、また、彼に教えを受けた人達のうちから、森林の調査を堅実に進めていく人達が何人か出てきたからである。Phra Winit (正確に言えば Phya Winit Wanandorn, 1896~1955) は最初の秀れたタイ人の植物学者だった。インドの帝国林業大学をおえて以来、タイ国森林局に務め、若い頃には Doi Sutep の森林園の造成とその植生調査に励み、晩年には森林局総裁をやって退官した。採集した植物標本の総数は約2000でそれ程大きなものではないが、質の良いもので、*Enumeratio* にも最大限に引用されている。Kerr が英国へ帰国した頃からは採集を止しているが、それは、森林局の中での仕事が徐々に忙しくなって、森林で仕事をする機会に恵まれなくなったものなのだろう。Nai Put (1877~ca. 1955) は Kerr の植物採集の助手を務めた人だから、この人の行動は Kerr と全く一致したものだった。この人もまた Kerr の帰国後は植物採集はやっていない。Kerr が政府の植物学者になってから助手になったのは Nai Rabil Bunnag (1902~現存) で、この人も自分で採集した数はわずかだが、Kerr と切り離して考えることのできない人だろう。Phya Wanapruek Phicharn (1879~ca. 1955) も Winit と同じ帝国森林大学をおえて森林局へ入った人で、後年には Linnean Society の会員にも推挙されている。Mom Chao Lakshnakara (1902~現存) は農林省の役人で、Kerr の Botanic Department が農林省に属するようになって以来助手を務め、Kerr の帰国後はその後継者となり、1962年に退官するまでに幾つかの調査旅行を指揮している。*Enumeratio* の第3巻第2分冊は彼の手で刊行されている。

第2次大戦前のタイ国の植物調査で Kerr にそれ程依存しないで行なわれたものに J.F.C. Rock (1884~1962) のものがある。彼は1919年と1920年と2度タイ国へやって来て、2度目には Chiangmai で Kerr に

も逢っている。1920年の旅行の際に北タイの Doi Sutep, Doi Chiengdao, Chiengrai, Me Ping と Korat で採集したものが重要なもので、タイ国からビルマの Shan States に移動し、さらに雲南とチベットで大量の植物を採集している。上に述べて来た人達の標本が Kew 腊葉館か大英博物館かに収蔵されたのに対して、Rock の採集品のほとんどは米国に運び込まれ Smithsonian Institution, Gray Herbarium や Honolulu の B.P. Bishop Museum で専門家の研究に供されているが¹⁾, *Enumeratio* にもほとんどのものが引用されている。それから、書き落してならないことは、我が早田文蔵先生も北タイで採集しておられることである。第2回の印度支那調査に向かわれた1921年、北タイの Doi Sutep とその周辺で採集をされ、その標本は東京大学に残されている。

5 第2次大戦後の調査

Schmidt Expedition や Lindhard 採集品などで、デンマークはタイ国植物調査についてはその初日から深い関わりを持っていた。しかし、本式に Thai-Danish Botanical Expedition が組まれるようになったのは戦後になってからであり、デンマーク駐タイ大使だった G. Seidenfaden の果たした役割も大きなものだった。(彼の伯父 Major Seidenfaden も Bangkok に居たことがあり、Kerr とは深い交わりを持っていた。)

戦後の Thai-Danish Botanical Expedition は1957年の現地調査から始まり、1966年までに数回の調査隊が森林へ入っている。実戦指揮を執っているのは Kai Larsen で、この人はショウガ科の分類などを手がけたこともあるけれども、一番熱心にやっているのは細胞分類学で、タイ国の植物の染色体の形態は彼の仕事によってずい分よく知られるようになった。そんな仕事からも伺えるように、このデンマーク隊は、戦前の調査のように維管束植物を蒐めてきて腊葉標本で調べるだけではなくて、生きた材料についてある程度分析的な研究を試みようとしているし、隠花植物にも一方ならぬ興味をもっていている。今までに調査に参加したのは、Kai Larsen を始め、K. Gram, C.S. Larsen, Th. Sørensen, B. & B.D. Hansen, F. Floto, G. Seidenfaden らであり、Bangkok の Tem Smitinand はこの調査隊と終始密接な関係を

もって行動している。

デンマークには、Schmidt や Lindhard などの採集品の他に、今世紀初頭の A. P. N. Vesterdal をはじめ、1929年に E.S. Nielsen, 1923~38年には C.W. Franck が東南アジア旅行の途次に立ち寄ったタイ国から持ち帰った標本もあるし、1934, 5年に G. Seidenfaden が採集した2500点に及ぶ標品も収蔵されており、それらの資料も、新しい調査隊の蒐集品と同時に、それぞれの群の専門家の研究資料に供され、少しずつ陽の目を見るようになっていく。研究結果は *Dansk Botanisk Arkiv*¹⁶⁾ の20巻と23巻がタイ国の植物調査報告のための特集号になって、研究の進んだ群から順に公表されている。この調査はさらに継続される予定だそうで、Bangkok で企画されているタイ国植物誌出版の構想とも、今のところ、最も密接な関係をもっている。

また、Thai-Danish Botanical Expedition の実現に最も大きな陰の力となった先のデンマーク駐タイ大使の G. Seidenfaden は早くから植物学にも興味を持っていて、Bangkok の Tem Smitinand と共著でタイ国産ラン類の仮目録²⁸⁾を出版していたが、最近全4巻がめでたく完結している。

Florae Siamensis Enumeratio 第3巻の完結に実質的な協力をし、Seidenfaden とランの仮目録を編んだタイ国王立森林局の Tem Smitinand は森林局腊葉館の主任であるが、非常に熱心な植物分類学者で、今ではタイ国植物相の研究は彼を度外視して進めることができなくなっている。Unesco の資金を得て編もうとしているタイ国植物誌の計画も、彼が中心になって各地の専門家の協力を得ることができるなら、決して軽々しい夢物語に終ることもないだろうと思われる。デンマークとの共同研究の資料蒐集だけでなく、Tem Smitinand は個人でも国内をよく歩き、鋭敏な観察力をもって、立派な植物標本を、森林局腊葉館にどしどし蒐めている。この国の植物分類学関係の雑用の一切を引き受けている上に、比較する資料も文献も乏しい現状では、彼の研究が遅々として進まないのは当然ながら、彼の蒐集している資料が多く専門家の研究に委ねられることになったら、さぞかしこの国の植物相に関する知識は一段と飛躍することだろうと思われる。まだまだタイ国の人だけでこの国の学問を支えるという時が来るまでには暇がかかり

そうだけれども、Tem Smitinand の存在は、例外的とはいえ、この国の学問の将来に明かるい灯を投げかけるものに思われる。

ここ数年、タイ国の各方面における発展には目を見張るものがある。そして、そのことが、この国へ各国からいろんな類の人達が訪うて来ることを可能にしている。植物学徒の場合も例外ではない。一つ一つ並べることができぬ程多くの人達がタイ国を訪れ、少しずつ標本を採集している。それらのうちの大部分は、今まで、研究もされないままに死蔵されている。タイ国は地理的にヒマラヤ要素の植物とマレイシア要素の植物との接点に位している。この地の植物相が正確に把握されることは、これら二つの植物区系を比較し、植物地理の大綱的な問題点を整理するために非常に重要な意味をもっている。せっかくの調査資料がいたずらに埋没しているようでは、この学の分野にとっては甚だしい損失だといわねばならない。タイ国植物誌の研究がそんな段階で止まっていることがないようにと念じる所以である。

タイ国植物相に関する文献目録

以下に、タイ国の植物相に関する主な文献を列挙した。一々挙げはしなかったが、Siam Society の博物学関係の出版物には、小さな論文が沢山載っている。また、いろいろの植物群についての monograph で当然タイ国の資料に言及されているものもあるが、それらもここでは一切省略した。

- 1) Christensen, C. 1929. "Asiatic Pteridophyta Collected by Joseph F. Rock 1920-1924," *Contr. U.S. Nat. Herb.*, 26: 265-337.
- 2) Craib, W. C. 1912-1913. "Contributions to the Flora of Siam (Dicotyledones & Monocotyledones)," *Aberdeen Univ. Studies*, no. 57 & 61.
- 3) _____. 1922-1928. "Some New Species from Siam," *Gard. Ghron.*, ser. 3, vol. 72 & 83.
- 4) _____ & al. 1911-1940. "Contributions to the Flora of Siam," *Kew Bull.*, 1911: 1-60, 385-474. 1912: 144-155, 264-269, 397-435. 1913: 65-72, 199-204. 1914: 4-11, 122-132, 279-285. 1915: 419-433. 1916: 259-269.

- 1918: 362-371. 1920: 300-305. 1922: 165-174, 225-241. 1924: 81-98. 1925: 7-23, 367-394, 404-423. 1926: 154-174, 337-363. 1927: 56-72, 164-174, 212-220, 374-395. 1928: 62-72, 234-247. 1929: 105-119. 1930: 161-174, 313-327, 405-427. 1931: 206-221, 275-280, 441-448. 1932: 137-149, 276-289, 330-338, 425-437, 475-486. 1933: 18-30. 1935: 326-335. 1936: 34-47. 1937: 71-75, 87-94, 371-392, 505-510. 1938: 24-32, 98-106, 127-133, 199-209, 445-454. 1939: 109-150, 456-465. 1940: 180-186.
- 5) Craib, W.C. & al. 1925-1962. *Florae Siamensis Enumeratio*. 3 vols. Bangkok.
- 6) Hooker, J.D. 1872-1897. *Flora of British India*. 7 vols. London.
- 7) Hosséus, C.C. 1907. "Eine neue Rafflesiaceengattung aus Siam," *Engl. Bot. Jahrb.*, 41: 55-61.
- 8) _____. 1907. "Die aus Siam bekannten Acanthaceen," *Engl. Bot. Jahrb.*, 41: 62-73.
- 9) _____. 1907. "Zwei interessante Neuheiten aus Siam in Kgl. Bot. Garten zu Dahlem," *Notizbl. Bot. Gart. Berl.*, 4: 314-318.
- 10) _____. 1908. "Beiträge zur Flora des Doi Sutep," *Engl. Bot. Jahrb.*, 40. Beibl. 93: 92-99.
- 11) _____. 1910. "Beiträge zur Elora Siams," *Bot. Centralbl. Beih.*, 27 (2): 455-507.
- 12) _____. 1911. "Beiträge zur Flora von Wang Djao am Mä Ping in Mittel-Siam," *Engl. Bot. Jahrb.*, 45: 366-374.
- 13) _____. 1911. "Die botanischen Ergebnisse meiner Expedition nach Siam," *Bot. Centralbl. Beih.*, 28 (2): 357-457.
- 14) Kerr, A. F. G. 1937-1943. "Descriptions of New Species," *Hook. Icon. Pl.*, 34: t. 3332. 35: t. 3406, 3407, 3435.
- 15) König, A. 1783. In Retzius, *Observationes Botanicae*, Vol. 3, appendix.

- 16) Larsen, K. & al. 1961-. "Studies in the Flora of Thailand," *Dansk Bot. Ark.*, Vol. 20 & 23.
- 17) Lecomte, M.H. ed. 1907-1951. *Flore Générale de l'Indo-Chine*. 7 vols. Paris.
- 18) Ostenfeld, C. H. 1905. "A list of Plants Collected in the Raheng District, Upper Siam, by Mr. E. Lindhard," *Bull. Herb. Boiss.*, ser. II, 5: 709-724.
- 19) Pierre, L. 1879-1899. *Flore Forestière de la Cochinchine*. Paris.
- 20) Ridley, H. N. 1893. "On the Flora of the Eastern Coast of the Malay Peninsula," *Transact. Linn. Soc.*, ser. II, Vol. 3.
- 21) ————. 1911. "An Account of a botanical Expedition to Lower Siam," *Journ. Str. Br. Roy. As. Soc.*, 59: 15-234.
- 22) ————. 1912. "A Botanical Excursion to Pulau Adang," *Journ. Str. Br. Roy. As. Soc.*, 61: 45-65.
- 23) ————. 1913. "Botanical Expedition to Lower Siam," *Gard. Chron.*, 49: 361-362, 383-384, 406-407.
- 24) ————. 1915. "The Plants of Koh Samui and Koh Pennan," *Journ. F.M.S. Mus.*, 5: 158-163.
- 25) ————. 1920. "On a Collection of Plants from Peninsular Siam," *Journ. F. M. S. Mus.*, 10: 65-126.
- 26) ————. 1922-1925. *Flora of the Malay Peninsula*. 5 vols. London.
- 27) Schmidt, J. ed. 1900-1916. "Flora of Koh Chang," *Bot. Tidsskr.*, vol. 24-32.
- 28) Seidenfaden, G. & T. Smitinand. 1959-1965. *The Orchids of Thailand, a Preliminary List*. 4 vols. Bangkok.
- 29) Summerhayes, V.S. 1946. "Paphopedilum callosum," *Curtis' Bot. Mag.*, 164: t. 9671.
- 30) Williams, F.N. 1904-1905. "Liste des Plantes Connues du Siam," *Bull. Herb. Boiss.*, ser. II, 4: 217-232, 361-372, 1027-1034. 5: 17-32, 216-227, 428-439, 949-968.

参 考 文 献

上の目録に挙げられた文献は全部この小文にとっても大切な参考文献となるものであるが、直接植物相の論議に関係しないもので、この文のために重要な資料となったものを以下に掲げる。

- 31) Burkill, I.H. 1927. "Botanical Collectors, Collections and Collecting Places in the Malay Peninsula," *Gard. Bull. S.S.*, 4: 113-202.
- 32) Chock, A. K. 1963. "J. F. Rock, 1884-1962," *Taxon*, 12: 89-102.
- 33) Jacobs, M. 1962. "Reliquiae Kerrianae," *Blumea*, 11: 427-493.
- 34) Kerr, A.F.G. 1933. "William Grant Craib," *Kew Bull.*, 1933: 409-412.
- 35) Kew Bull. ed. 1930. "Dr. Eryl Smith," *Kew Bull.*, 1930: 175.
- 36) Steenis-Kruseman, M.J. van. 1950. *Flora Malesiana*. Vol. 1, special part. Groningen.
- 37) Williams, F. N. 1903. "The Botany of Siam," *Journ. Bot.*, 1903: 306-309.